

## ソ連邦崩壊と日本語学 - 北東アジアにおける 20 年間のフィールドワークの歩み -

司会：白石 英才  
札幌学院大学  
(危機言語小委員会委員)

現地調査において良き話者と巡り合い、言語情報を採録することは私が専門とするニヴフ語（ロシア極東、パレオアジア諸語）においても確実に難しくなっている。話者は毎年亡くなり、あるいは高齢のため調査に耐えられないほどの体力の衰えを見せる。苦労してビザを取得し、乱気流では時に激しく揺れるウクライナ製のターボプロップ機（AN-24）に乗り込み、夜行列車の 4 人乗りコンパートメントでは同室者のヴォトカと豚脂の勧めを丁重に断り、穴だらけの未舗装路を時に時速 100km を超えるスピードで疾走する「高速バス」の中でひたすら DAT とノート PC の無事を祈り続けて目的地にたどり着いた末に、話者に恵まれず調査を終える落胆は非常に大きい。しかし、東西冷戦下において現地調査など望むべくもなかった先達に比べれば我々にははるかに恵まれているのであろう。彼らはまずもってソビエト政権下にあったニヴフ人の発音を耳にすることはなかった。時折ソビエトから手に入る文献から彼地の話者の言語を、誤植の疑いに悩みながら、想像するしかなかったに違いない。

こうした時代背景を顧みるに、1985 年のミハイル・ゴルバチョフの登場、そして彼の「新思考外交」「ペレストロイカ」がもたらした東西のデタント、冷戦の終結は北東アジアの言語学にとっても大きな意味を持ったと言わねばならない。多くの言語学者がそれまで西側研究者に禁止されていた地域に立ち入り現地調査を行った。彼らはそこで話者に会い、それまで文献の中でしか知り得なかった言語に直に接するに至った。1999 年に初めてアムール川下流域の村を訪れてニヴフ人話者を調査し、彼らの語頭子音交替のパターンがクレイノヴィッチが半世紀以上も前に記録したパターンとほぼ同じと判明したときの衝撃と感動は鮮明に覚えている。それはクレイノヴィッチの記述の正確さと同時に、ソビエト政権下でロシア語の使用を強いられ、もっぱらロシア語を使って暮らしてきたはずの彼らの母語能力の高さをも証明するものだった。まだ現地調査ができる、そう判断した多くの言語学者が現地に入り、現在も調査を行っている。

一方、北東アジアの言語の多くがいわゆる少数言語である以上、少数言語研究をめぐる昨今の様々な批判と無縁でいられるわけではない。社会がグローバル化する中、なぜあえて少数言語を研究するのは、とりわけ我々の研究費の少なからぬ部分が税金でまかなわれている以上、常に厳しく自らに問い続けなければならない。またこのような研究が研究者の自己満足のために行われているとする批判とも真摯に向き合わねばならない。私自身、何度も現

地を訪れながら、なかなか改善の兆しの見えない現地の人々の生活を見るにつけ、彼らを単に利用しているだけではないかと自責の念にかられることも一度や二度ではない。

しかしそれでも話者数の減少に歯止めのかからない現段階では、たとえ自己満足のためでもいいから、自らの気力と体力の続く限り話者から言語情報を 1 分 1 秒でも多く採録し、それをいずれ公開するよう努めるべきであると個人的には考えている。その上で、我々の仕事が単なる自己満足なのか、あるいは社会通念上何らかの意味を持ちうるものなのかの判断は、言語学者や歴史家といった専門家も含めた後世の人々に委ねるしかないのではないかとやや無責任ではあるが思うのである。ただし仕事の評価とは仕事の目的如何で変わるものである。少しずつでも話者をはじめとする現地の人々の要請に応えるよう努力することで、我々の仕事は多くの人にとり意味のあるものになりうる。今夏の北サハリンでの調査で私は複数の人から 1) 語彙集や会話集ではない、より本格的な辞書の作成、2) 様々な音連続の場合を含めたニヴフ語音声の詳細に記述した教材の作成を強く要請された。いずれも私個人の能力にはあまりあるものだが、こうした類の仕事はやはり言語学者が取り組むべきであろう。そのようなときにそれまで採録した言語情報は、たとえそれが当初は自己満足のため採録したものであっても、必ず役に立つはずである。

本シンポジウムの報告者 4 名はいずれも北東アジアをフィールドとしているが、話者や言語に対するスタンスはむろん一様ではない。それでもいくつかの共通点はある。データの採録、公刊、研究成果の現地還元を重視し、そのために一定の地域を繰り返し訪れるという長期的視野にたった研究スタイルは、この地域をフィールドとし、日本に足場を持つ研究者の多くに共通する特徴である。1999 年に始まった文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究 A 『環太平洋の消滅に瀕した言語にかんする緊急調査研究』」（領域代表：宮岡伯人）はそうした日本のフィールド言語学の特徴、成果が十二分に発揮されたものと言ってよいであろう。

また、ロシア側研究者の現地調査が研究費の減少（皮肉にもペレストロイカの結果）により著しく困難となり、また欧米からも地理的に遠いこの地域におけるフィールドワークは、ここ 10 数年日本の研究者の独壇場であったと言っても過言ではない。こうした経緯を踏まえ、本シンポジウムではこの地域をフィールドとする 4 人の研究者に過去 20 年における日本言語学の貢献についてそれぞれが専門とする言語、地域について報告、総括してもらおう。現地調査の成果がもたらした特筆すべき研究は何か。研究成果の現地還元において特筆すべきものは何か。現地調査により明らかとなった言語の特徴は何か。これまでどの地域、どの方言、あるいはどのような種類の言語データについて蓄積があり、一方でどのようなデータが不足しているのか。今後の調査についてはどのような見通しがあるのか。あるいは言語そのものの見通しについてどのような感触を得ているのか、公式の統計データに表れない情報なども交えて率直に報告、議論してもらいたい。